はじめに

ベネッセ教育総合研究所は、これからの新しい時代をたくましく幸せに生きるために、子どもたちが身につける必要がある資質・能力の育成を目指し、その指導と評価に関して「アクティブ・ラーニングを活用した指導と評価研究」を立ち上げ、研究を進めてきました。

子どもたちに求められる資質・能力を伸ばしていくためには、受け身的な学びでは不十分です。課題に対して、学習者が今までの経験や関連する情報を生かして、主体的に考え、社会とかかわって議論しながら解決や提案をしていくことを、うまくいくことも、いかないことも経験しながら学ぶことが重要だと考えます。

そこで、資質・能力の育成にはどのような指導が効果的なのか、どのように評価していけばよいのかということについて、先進的に実践している学校・先生方にご協力をいただき、それらの実践事例について専門家を交えた議論・分析研究を行い、ポイントを明らかにすることを試みました。

このレポートでは、OECDの先行研究や諸外国のコンピテンシーなどを参考に、資質・能力のあり方について整理をした内容、及び授業設計（目標→指導→評価）のポイントについて、事例とともにまとめています。これからの授業を考える観点やチェックポイントとして、ご参考になれば幸いです。

ベネッセ教育総合研究所 カリキュラム研究開発室長
中垣 眞紀

研究概要

◎研究内容

①新学習指導要領に向けて、これからの時代に求められる資質・能力を詳細化して整理する。

②求められる資質・能力を育むために、アクティブ・ラーニングを活用して指導・評価を行う先進的な事例を分析し、一般化する。

◎アドバイスをいただいた専門家（①②各五十音順）

①の研究内容への助言

東京大学大学院 教授　**秋田 喜代美**
奈良教育大学大学院 教授　**小柳 和喜雄**
京都大学大学院 教授　**楠見 孝**
上智大学 教授　**奈須 正裕**

②の研究内容への助言

東京工業大学 名誉教授　**赤堀 侃司**
武蔵野大学 特任教授　**荒木 貴之**
東京学芸大学 准教授　**北澤 武**
東京女子体育大学 教授　**田中 洋一**

＊プロフィールは取材時（2017年1～2月）のものです。

研究まとめ

育みたい能力 を明確にし、生徒の思考を 促すような授業デザインを

主体的に学び続けるために必要な3つの要素とメタ認知

本研究では、これからの社会を生きる子どもたちが身につけるべき資質・能力を育むための指導・評価のポイントを明らかにすることを目的に、まず、今後求められる資質・能力の整理を行いました。

文部科学省における新学習指導要領に向けた議論、世界各国における先行研究でのグローバルな観点、及びベネッセがこれまで蓄積してきた知見を基に、この分野における国内外の有識者からのアドバイスを得ながら、「これから育成すべき資質・能力」として詳細に整理したのが、次の3つの要素です。

◎自律的活動力や自他理解など、学び続けるための基盤となる「態度・価値観」
◎コラボレーション力や創造的・批判的思考力、学び方といった「スキル」
◎各教科等を通じて習得する「知識」

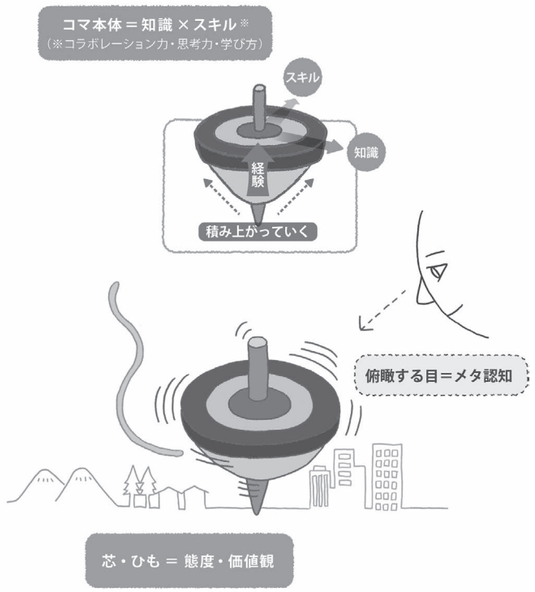
これらの資質・能力は、相互に関係し合いながら育成されるものであり、子どもたちがすべての力を総動員して活動できることが大切になります。

図1は、子どもたちが活動する状態を「回るコマ」に見立てて、それぞれの関係を整理したものです。子どもたちが「主体的に活動している状態」を「コマが回り続けている状態」と考えると、活動し続けるためには「知識」×「スキル」（コマ本体）がバランスよく育っていることが必要であり、それを支える「態度・価値観」（芯・ひも）がしっかりしていることが基盤となります。さらに、周りの環境、つまり社会と多様な接点を持つことで、自分が活動する目的やビジョンが磨かれていくと考えられます。

これらに加えて重要なのが、**「メタ認知」**です。自分がどのような状態にあるのかを俯瞰的・客観的に捉えることで、回り方を調整できるからです。そして、子どもの興味・関心に応じて得意な領域でスキルを磨いていくことによって、自分らしい形や色のコマとなり、特性や能力を生かして成長していくことができると考えます。

この3つの資質・能力を詳細化したものが、**図2**です。これらは、新学習指導要領の答申で示された「育成を目指す資質・能力の三つの柱」に対応しています。本研究では、これらの資質・能力を育むために、どのような指導と評価が求められるのかについて、研究を進めました。

図1　これから求められる資質・能力（「回るコマ」に例えると）



コマ本体を「知識」×「スキル」と捉え、経験を積み重ねることでだんだん大きくなっていく。そして、コマがうまく回るためには、芯・ひもがしっかりすること、つまり「態度・価値観」のあり方も重要となる。さらに、このコマが回っている状態を眺める「メタ認知」が働くことで、自分の活動状態を俯瞰的・客観的に捉え、コマがうまく回るように調整できるようになることを表している。

図2　これから求められる資質・能力　一覧表（ベネッセ教育総合研究所編）

能力要素		大項目	中項目	概要	文部科学省「育成を目指す資質・能力の三つの柱」
俯瞰する目	芯・ひも：態度・価値観	態度・価値観	自律的活動力	心身を安定・維持させながら、主体的に考え、行動する	学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」（どのように社会・世界とかかわりよりよい人生を送るか）
メタ認知	芯・ひも：態度・価値観	態度・価値観	自他理解	自分を知り、他者を理解して尊重する 自分と他者の関係性を認識する	
メタ認知	芯・ひも：態度・価値観	態度・価値観	文化理解・社会倫理	グローバル社会において、地球市民として多様な社会や文化に関心を持ち、貢献しようとする	
メタ認知	芯・ひも：態度・価値観	態度・価値観	ビジョン形成	自分なりの生き方、よりよい社会を考える	
メタ認知	芯・ひも：態度・価値観	態度・価値観	学習観	学ぶことの意味や価値を認識する	
メタ認知	コマ本体：スキル	コラボレーション力	関係形成力	人と新たな関係を構築し、良好な関係をつくる	未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」（理解していること・できることをどう使うか）
メタ認知	コマ本体：スキル	コラボレーション力	コミュニケーション方略	相手意識・目的意識を持って、意見や気持ちを伝え合う	
メタ認知	コマ本体：スキル	コラボレーション力	チームワーク、役割認識・遂行力	力を合わせて協働的に取り組む 自己の立場や役割を認識して行動する	
メタ認知	コマ本体：スキル	創造的・批判的思考力	問題発見・課題認識	問題に気づいたり、何が課題かを明確化したりする	
メタ認知	コマ本体：スキル	創造的・批判的思考力	情報収集・分析・解釈	問題解決のために、情報を収集し、分析・解釈する	
メタ認知	コマ本体：スキル	創造的・批判的思考力	推論	情報を基に論理的に筋道を立てて考え、目的に合っているかを吟味する	
メタ認知	コマ本体：スキル	創造的・批判的思考力	解決策・主張	解決策を立て、説得力を持って表現する 新たな価値を創造する	
メタ認知	コマ本体：スキル	創造的・批判的思考力	発想の転換	視点を変えるなど、柔軟性を持って考える	
メタ認知	コマ本体：スキル	学び方	学び方	学び方を習得したり、計画、振り返り、調整したりしながら、自分の学びをデザインする	
メタ認知	コマ本体：知識	知識	知識・技能	各教科等において習得する知識や技能（活用可能な概念化された知識まで含む）	生きて働く「知識・技能」（何を理解しているか、何ができるか）

詳細な研究内容は、ベネッセ教育総合研究所のホームページをご覧ください。▶▶▶ http://berd.benesse.jp
トップページ＞特集＞アクティブ・ラーニングを活用した指導と評価研究

図3 **生徒主体の学びのデザイン**（ベネッセ教育総合研究所編）

実施ステップ	目標→全体計画		仕込み（事前準備）			授業				評価
	目標設定（資質・能力ベースに）	全体計画（年間）	学習環境	教材（素材）	教材（課題・問い）	授業設計（授業単位）	指導	成果／アウトプット	振り返り	評価（多面的評価）
ポイント	■育てたい生徒の姿を具体的に描く。 ■育みたい能力を明確にする。 ■目標を具体的に、生徒がイメージできるようにする。 ●生徒がなりたい姿のイメージを持てるようにする ●評価の観点（成果のイメージ）を生徒と共有する	■基礎的なスキル習得につながる活動を初期に組み込むなど、目的に応じて全体を設計する。 ■生徒の学びへの意識を変革する（受け身のマインドセットを変える）（初期の段階）。 ■学び方を学ばせる。 • 学習そのものの進め方 • 探究の進め方 ■社会につながる学習の場を活用する（外部リソースの取り入れ）。	■対話によって学習が深められる環境を用意する。	■思考を促す素材を用意する。 〈素材の例〉 ●オリジナル素材の場合 • 多面的な視点が持てる素材 • 自分の日常と結びつく素材 ●教科書の場合 • 既存の教科書を分析し、どの能力が育成できるのかを明確にして使用する • 情報を批判的に捉える対象としても、教科書を利用する ●入試問題の場合 • 入試問題を分析し、能力の育成や深い理解が促されるかを明確にして、活用する ●論文などの場合 • 探究活動のために、学術論文なども含めた必要な情報を生徒自身が集め、活用することを支援する	■思考を促す課題・問いを設定する。 〈問いの例〉 ●理解を深める問い •「～について論ぜよ」など、理解をしていないとすぐに答えにたどり着かない、いくつかの視点が含まれる問い ●思考するための問い •「○と△はどのような点で似ているか」「△と□を比較してどちらを選ぶか論ぜよ」など ●複数の情報を分析して多面的に考える課題や問い ●オープンエンドで多面的に考え、自分の考えを深められる問い ※上記の観点を取り入れて、ワークシートの形式などで教材化する ●探究テーマの自己設定の支援 • 興味・関心が持てるもの • 社会に役立つと考えられるもの	■個⇒グループ⇒個の流れで、思考を深める。 • 問いに対し、まず個人で考える • その考えをペアまたはグループで共有し議論する中で、多様な意見、多面的な視野で考える • 上記を踏まえ最終的に個人の考えをまとめる流れで、授業を設計する ■対話を通じた学習を核にする。	■生徒の自由な思考を促す。 • 活動を制限しない • 思考の自由を与える • 考え方を示す • ヒントを出す • 不足点を伝える • 問い返す ■生徒間で多様な考えを認め合うように促す。 ■生徒の状況に合わせ、柔軟に追加説明や新しい教材の提示などの支援を行う（生徒主体が難しい場合の修正）。	■各自の思考、成果をアウトプットさせる。 〈アウトプットの例〉 ●テーマに対する自分の考えと根拠の発表 ●小論文作成 ●探究・研究レポート作成 ●校内の発表大会など、保護者や他学年の生徒など聴衆がいる場での発表 ●学会や研究会など校外の発表の場での発表	■最初の目標に照らし合わせて、成果の振り返りをさせる。 〈振り返り活動の例〉 ●成果・プロセスの振り返り • 自分の力がついたかどうか • 発表などで、よかった点や課題 • 問題のどこを、どうして間違えたのか • 疑問に思うこととそれに対する予想 • 上記の振り返りから理解を深め改善点を見いだす（自分で・対話を通して） ●学び方の振り返り • 友だちの学び方を知ることで自分の学び方をよりよくする ●他者評価を踏まえた振り返り • 発表などに対する他者からの意見・感想・評価を踏まえて自分の改善点を見いだす	■多様な生徒の評価。 ●総括的評価・形成的評価 • 客観テスト • 受賞・入賞 • ルーブリック評価 • 他者からの評価 • 自己評価　など ■教師自身の振り返り。 • 最初の目標に照らし合わせて到達状況を振り返る • 生徒からの評価を受けて、改善点を検討する（アンケートなど）

深い思考を促す
生徒が主体となる授業づくりとは？

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点）」からの授業改善が求められています。そこで、本研究では、**図2（P.2）**に示した資質・能力を育むための指導と評価のポイントを明らかにすることに向けて、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れて授業改善を進めている、東京都立戸山高校、東京都立国立（くにたち）高校、東京都私立・玉川学園高等部、広島県私立・安田学園安田女子中学高校の４校の先生方の協力を得て、研究を行いました。研究・分析は、実際の授業の参観、担当教師・生徒へのインタビューの実施と、担当教師と専門家を交えたディスカッションを通じて行いました。

この４校は、設置区分、立地、学校規模、生徒の希望進路などに違いがあり、さらに、研究対象とした教科も異なりますが、その分析結果を見ていくと、教師が授業づくりで大切にしている点に共通する、重要なポイントが見えてきました。それらを「生徒主体の学びのデザイン」としてまとめたのが**図3**です。

まず、「どのような生徒を育てたいか」という具体的な姿や、資質・能力をベースに目標を設定し、それを基に年間の授業設計を行います。そして、生徒に多面的な思考を促すような学習環境や教材（素材、課題・問い）を準備して授業に臨んでいるという点が、共通していました。授業では、まず個人ワークで自分の考えをしっかりと持ってからグループワークを行い、他者と多様な考えを交流することで思考を深め、その考えをアウトプットすることも、共通項として挙げられます。さらに、アウトプットを通して、自分に身についた力や、活動全体を振り返る場面も、効果的に取り入れていました。また、評価も様々な方法を用いて多面的な評価を行っていました。

「アクティブ・ラーニング」というと、「グループ活動」という型で捉えられがちですが、ただ話し合えばよいということではありません。生徒の思考を広げ、深めるために、生徒が自ら考えたくなるような課題の設定と、授業中の生徒の状況に応じた助言や支援を行うことで、生徒の思考は深化していきます。

また、生徒たちの対話による深い学びのためには、仲間と安心して対話できる学級であることが土台となります。自分自身が受け入れられているという安心感があるからこそ、生徒は他者からの批判を恐れずに発言し、議論できるのです。そして、生徒自身が対話によって学びが深化すると実感できることが、何より重要なのです。

授業における
目標から評価までのサイクルの見直しを

図3に示した内容をすべて用意して、この通りに行う必要はありません。今一度、ご自身の授業における学習活動の目的と実施内容を振り返り、確認してみるとよいと思います。

例えば、授業における「課題」や「問い」は、生徒の思考を促すものになっているか。どのように生徒の考えをアウトプットさせているか。生徒自身が学びを振り返る機会や時間はあるか――。ねらいどおりに目標–指導–評価のサイクルが回っているかどうか、先生方のよりよくしたい観点を見いだすためにご活用いただけたらと思います。

次ページから、研究にご協力いただいた４校について、外部リソースを活用した年間の授業設計（戸山高校）、対話を通じた学びのための学習環境の用意（国立高校）、教科横断で考えられた批判的思考力を伸ばすための教材（素材・問い）の工夫（玉川学園・安田学園）に関する取り組みを中心に紹介しています。さらに、本研究のホームページ（ページ下参照）では、授業の様子や、どのような資質・能力の育成を企図し、指導しているのかを分析レポートにまとめています。

本研究をご覧いただくことが、生徒のどのような力を伸ばしていきたいのか、今の授業をどのように改善したいのかを考えるきっかけとなり、「生徒主体の学びのデザイン」に向けた指導と評価のヒントとして、参考にしていただければ幸いです。

詳細な研究内容は、ベネッセ教育総合研究所のホームページをご覧ください。▶▶▶ http://berd.benesse.jp
トップページ>特集>アクティブ・ラーニングを活用した指導と評価研究